

# 島根県における竹林経営に関する問題点について

遠山富太郎 (造林学研究室)

三宅 正 (林業工学研究室)

Tomitaro Tōyama

Tadashi Miyake

On the Bamboo Forest Management  
in Shimane Prefecture

## 1. ま え が き

昭和35年林業統計要覧によると、島根県の竹林面積は6178haで全国7位、竹材生産量は453,000束で、全国9位。県内特殊林産物ではしいたけ、わさびについてる位を占めている。しかし最近の情勢によるものか、島根県農業基本計画書(昭和34年)によると、将来5箇年にわたって竹林面積、生産量共に現状維持を計画されているにとどまっている。県内の農山村のどこにも竹林が見られ竹林が利用され近接地に竹パルプ工場まででありながら、このような見とおしは何故であろうか。上田博士<sup>2)</sup>によって竹林の特徴と発展策をあげると

1. 年々保続伐採一収入可能、
2. 小面積経営可能、
3. 管理効果あげやすく農業労働と競合が少ない、
4. 新植の場合も3~4年で伐採可能、

にもかかわらず竹林の発展しない理由は

1. 知識の普及しなかったこと、
2. 大量利用の道が開けなかったこと。

しかし、竹パルプが実用化の段階に入って、繊維資源化が拡大の傾向にあるから今後の発展策として

1. 竹林の知識、技術の普及、
2. 竹パルプの拡大生産、
3. 零細竹林所有者からの集荷を円滑にする組織の拡充。(運搬はそれほど問題にならない)

本県は全国唯一の竹パルプ工場(日東製紙K K)を近接の萩市にひかえ、大量利用にも利有であるのに、依然として竹林の経営、生産共に期待をもたれないのは何故かとりあえず実態をとらえることにより、原因と対策を明らかにしたい。

本調査は、京大教授上田弘一郎博士のおすすめと多大の御援助によるもので厚くお礼申上げたい。

## 2. 調 査 結 果

(a) 島根県林政課の資料によれば、八束郡内の鉄道に近い便利な竹林から鉄道貨車積込までの竹材生産費は次のとおりである。

第1表 竹材生産費 単位円/束 (昭34年調)

区分	立竹代	伐採費	結束費	山出費	駅出費	通運料	利潤	計
マダケ	60	30	10	30	20	16	20	186
メダケ	10	20	5	10	10	16	10	81

マダケについて見ればトラック道路までの生産費は130円/束となり、そのうちに立竹代60円/束を含むが、鉄道駅までの運搬距離が遠くなるに従って立竹代は安くなってくる。

また昭和32年度統計によれば竹林栽培面積3800ha、竹材生産量479,000束、竹林1ha当り生産量は126束となっている。

(b) 松江市内の忌部地区はモウソチク林が多くタケノコと竹材を生産している。竹林面積約80haのうち、実際に生産をあげているのは3割ぐらいとみられあとの竹林は放置されたままである。この地区の代表的な農家2軒について調査したが、いずれも農作業に忙しく追われて竹林の手入などを積極的に行う余裕がない。市の人糞尿くみとり自動車が入る道路近くの竹林はいくらでも施肥できるし、その結果驚くほどタケノコの生産量が増加した例もあるけれど、一般には竹林への関心が薄い。西忌部の80戸から年間約10,000kgのタケノコを出荷組合へ出しているが、竹林面積が10アール前後の零細所有者が多いので生産力を高めるには協同作業が必要と思われる。

1) 面積 3800ha 栽培竹林のみをさすものか。

2) 上田弘一郎:竹資源の利用と竹材の増産について(科学技術庁資源局資料第28号 昭.35)

輸出向スダレの原材料を製作する業者が、1時的な加工場を設けモウソウチク材を自動車 道路渡し140円/束の値段で買付けているが、原竹の不足のため間もなくこの地区を移動する予定である。

(c) 松江市内の1竹材業者は古くから県外移出の竹材を取扱い島根県東部の出雲地方一円に生産される竹材を多く仲買業者を通じて集荷している。マダケのトラック道路渡し価格は平均120~140円/束(昭和35年)。伐採、結束、山出すなわち道路までの伐出費は2、3寸の竹材で平均70円/束であるから、残りの50~70円/束が立竹代と仲買人の手数料となる。1人1日当り伐出工程は平均7束で約500円の賃金である。1ha当り竹材生産量が100~130束以上の竹林でないと伐出費が高くなり採算がとりにくいそうである。山陰本線宍道駅から分岐する本次線がこの出雲地方の中央部を南北に縦走しているが、竹材はこの沿線の各駅を利用せず全部松江駅に集荷し選別の上発送している。集荷駅を1つにきめた理由は、品質等級別に選別仕分ができ取引変更を生じた場合にも便である上貨車積込量が多く、また駅を分散すれば取扱保管料も高くなるからである。松江駅までの運搬距離は最大70kmで、地元のトラックまたは自動三輪車を備い少くとも1日2回往復できるよう遠近の産地を組み合わせるなど運搬費の軽減に努めている。平均積載量はトラック160束/台自動三輪車70~80束台。

(d) 山口県萩市にある竹パルプの製紙工場に入ってくる原料竹材は 東萩駅レール渡しまたは萩港甲板渡しの場合が1束当り平均マダケ100円、ハチク90円、モウソウチク80円である(昭和35年)。工場年間消費竹材約600,000束の種類別内訳はマダケ65%、ハチク20%、モウソウチク15%。その生産地は30%が島根県西部の石見地方、45%が、山口県、25%が九州の各地にわかれ、鉄道およびトラック運搬のほか30~50トン船舶により海上輸送を行い運搬費の低下をはかっている。1航海2,000束の輸送能力があり、帰り荷の運賃収入を見込むと、たとえば、島根県温泉津町から萩港まで(約120km)の運搬費20円/束となり、竹材の集荷範囲は海岸線からトラック運賃が20円/束以内の地域である。この場合マダケのトラック道路渡し価格は60円/束となるがパルプ用竹材の伐出工程は1人1日15~10束というから約35円/束の伐出費とすれば立竹代は25円/束と計算される。この工場は原料区なる集荷組織をつくり、各原料区には駐在員を置いて竹材の集荷に当ると共に山元道路から工場までの運搬を直接行っている。なお最近では竹林所有者と5~20年間の地上権設定契約を結び、竹林の改良育成を行い生産力を高めると同時に竹材の確保を期している。なお萩市内では輸出向竹スダレの加工が盛んであり、その概要を同市の資料により第2表に示した。

第2表 萩市内スダレ加工工場生産調

(昭和35年調)

区 分	内 訳	ス ダ レ 加 工 工 場		
		A 商店	B 商店	C 組合
年間原竹消費量		102,000	45,000	50,000
製 品 数 量	スラット	15,044 千才	6,097 千才	9,077 千才
	フェンス	1,692 "	991 "	—
	ヒゴ	1,734 "	475 "	8 "
	ポール	322,175 本	1,130 本	—
製 品 価 格	スラット	74,220 千円	28,260 千円	42,420 千円
	フェンス	5,441 "	3,640 "	—
	ヒゴ	13,590 "	3,481 "	43 "
	ポール	—	—	—
工場人員		140	90	450
原竹工場着価格円/束	マダケ 6寸上 7寸上	170 200~220	190 190~210	190~200 200~210
原竹集荷範囲と輸送方法		大部分は山口県萩市、阿武郡、その外大津郡、美弥郡、山口市、益田市などからトラックまたは自動三輪車により輸送		

- 註 1. 原竹消費量はマダケ90%、モウソウチク10%の割合、年間消費量はマダケ換算数。  
 2. 1才=1平方尺。  
 3. 製品価格は神戸の輸出業者渡し価格。  
 4. C組合の人員は萩市以外の組合員を含む。

(e) 鹿足郡 日原町の一商店は同町 周辺の竹林から年間約 70,000 束の竹材を 集荷している。 同店は第 3 表に示  
第 3 表 竹材トラック道路渡し価格 単位円/束

す買受値段で現物引換現金取引により集荷しているが、マダケは道路渡し平均 80~110 円/束の価格と言えよう。(昭和 35 年調)

マダケ	上等材		中等材		下等材	
		正 3 寸	110	2~3 寸	90~80	2~3 寸
	4~7 寸	130-120	4~7 寸	110~100	4~7 寸	90~80
モウソウチク	5~7 寸		40	8 寸以上		45

集荷量の内訳はマダケがモウソウチクよりもやや多く、マダケは輸出または加工用、モウソウチクはパルプ用に向けられる。道路からの集荷は自家用大型自動三輪車 2 台で行い 1 台平均 120 束を積んでいる。マダケの 1 町歩当り生産量は 1 回の伐採に対し 400~500 束程度であり、同店は竹林 3~4 年生を抜切りするよう指導している。また買受竹材 1 束当り 10 円の硫酸を渡し、竹林への施肥を奨励している。なお同店の談によれば大田地区におけるパルプ用竹材の道路渡し価格は 70~80 円/束である。

(f) 邇摩郡大国村の黒瀬氏は土地の旧家であるが、家族全員をあげて竹ひと筋に打込み、その所有する山林に数 0 種類の竹を育成し、特に亀甲竹、四角竹など銘竹は直接京都の業者に送り生産効果をあげている。かかる竹林は特殊な経営形態であり誰にも容易にできるものではなく貴重な存在と言わねばならないが、これにも問題が多く含まれていることと思う。同氏によれば大国附近の 15 部落には約 60ha の竹林があり年間少くとも 15000 束の竹材を生産しているというから毎年 1ha 当り 250 束の生産量と推定され、これはかなりの生産量といわねばならない。

### 3. あとがき

以上の調査から竹林経営を次のように分けて考えるのが問題を明かにする上に必要であろう。

1) モウソウチク林、調査した 忌部地区がこれに属する外に、既にカン詰工場をもっている島田村が代表的なものといえよう。ここでは問題はタケノコの処理販売技術にあって竹林経営上の問題は 2 次的である。

2) 銘竹、邇摩町の例でかなり有望であるが生産技術と個人的熱意が大きく経営の成果にひびく外に生産量の拡大に限度がある。

3) 竹材を目的にしたマダケ林等、本県として一般に取上げて研究問題としなければならないのはこの点であろう。

今回の調査によれば島根県産の竹材はマダケにおいて最近の価格がトラック道路渡し一般用 130~80 円/束、パルプ用 80~60 円/束の標準と推定され、パルプ用はきわめて安い。伐採搬出費が 70~35 円/束であるから、地理

的条件の不利な地域では採算のとれない竹林もあろうしまた立竹代は零で伐出作業を自家労働で行うことによって漸くその労賃が得られるような竹林も少なくないものと思われる。

竹材を目的とした竹林経営の問題点としてその発展の障害となっている因子をあげれば次のようになる。

- (1) 竹材の市価が安く収益が少ない。
- (2) 単位面積当り竹材の生産量がきわめて少ない。
- (3) 一般用竹材は需要が実に多種多様であるが流通機構が複雑で販路が狭い。
- (4) 竹幹が中空を有し容積が大きいので運搬費が高い。
- (5) 竹林面積 10アール前後の零細所有者が多い。
- (6) 竹林を所有する農家の多くは労力不足のため竹林に労力を投ずる余裕がない。

(7) 竹林所有者の竹林に対する関心が一般に薄い。これらの因子はお互いに関連影響し合っているが、かかる障害を前提として竹林経営の発展をはかるには次のような問題が取りあげられよう。

(1) まず適地において竹林の生産力を高め竹材の生産量を 1ha 当り年平均 200~300 束まで向上させる方法を講ずる。

(2) 増産された竹材のうちから良質のものを一般用に残りをパルプ用に向けて収益の増大をはかる。

(3) 一般用竹材は販路を確保する必要がある、その一方策として竹材の加工場を山元に誘致することが望ましい。

(4) 竹パルプは竹材の大量利用法であるが原料竹材の価格が安いから山元でチップに加工しパルプ工場へ搬入する方法が考えられ、これにはチップの機械、輸送、貯蔵などいろいろの問題を含んでいる。

(5) 竹林の零細所有者を集めて協同作業や協同経営により生産の合理化を期する。

(6) 竹林の生産力が高められあるいは協同経営が行われるならば、生産費はおのずから低下しようが、さらに積極的に架線運搬など簡単な機械力の導入を必要としよう。

(7) 竹材の新しい用途を開拓する。